



蕨太向集
上



琴太集序

和歌國詩也變而為連
歌為俳諧歌其猶詩變而
為騷賦為律絕乎時有汗
隆辭有長短俗有正變節
有緩急體裁雖異其情一
耳東都琴太以善俳諧歌
閑子世門生寓于崎陽以

蓼太、所著一章、示之清人
程、劍南程賦一絕、以寫其
意、且手書、以遺焉、時人艷
稱之、丁酉季夏、蓼太載酒
顧余、牛門請序其集、余與
之對酌、類狂而醉、作而嘆
曰、有是哉、昔者晁卿與唐
人唱酬、明人著、日本風土

記載和歌數篇、然則彼知
我有詩、有和歌矣、蓋未
知有連歌也、而况俳諧歌乎
知有俳諧歌者、乃自蓼太
始、今觀此集、著作太富、重
以示清人、則彼五言長城
殆將失墨守矣、蓋我
日出之邦

升平百五十年煥乎文教
洋溢海内此事雖小可以
觀餘波矣彼以其詩我以
吾歌各稱盈耳哉是為序
安永丁酉夏六月南畝子
序



序

まき記の序に書くつらりま柳の
系類にそと糸の能くわりかきも
いふことして夕暮らの雲を起し
きりけきもわく下法體傳のよき
やうけい海を只此道なり今や
隈なく若鄰よむらうらうら

うへるの然久し〜海の中〜
昨雪中菴の主藝冬もせ成翁の顔と
さうり晋子の花を何ぞい杉風雪の
寂ち我家ふ〜年〜海橋〜
月をかな〜郭〜は麻ねお〜
雪はつ〜日〜節〜了〜陽回生乳の
ちま〜〜轉ひ海崎日〜の〜

名を〜しわ〜ハ途遠〜茶湯〜
眼を何〜い〜何〜は山ぬ〜白〜
夏と〜のひ〜
さ〜紙書肆〜何集様〜
子規亭の虎を敵〜事〜
るぬ原云俳ま〜白の〜
筆のお〜た〜と誰〜

いふ事記まゝしていふ事記
あつた人
とて
聊
ら
趣
を
吐
月
速

巻古句集春之部

兼且

え日やうのこのあも
誰やうり掃とも
筆拵ぬ松
初鶉や又市子
若水や林
と朝の春

馬ふらもの又た盃をり初うりま
万方や爰八橋より破くや

鉢柱のそ形をてむしつるものよ
似てはし觸變のうごきあは世花の
あけふのををせし

阿しそりぬまいさうくや福寿草

六日の風枝をさうさぬけまう代乃
妻をむくこころも東海北
行締をわらふ

初うりや十日とを養のこころ

東嶽山のうら松屋とくふふ
縹りやそりれ端座を志くこの
地やふとあうり雪の音さうらふ
つと爰よふくは妻を運て田の原は家
うごふ

志川うさの継りさう今月日か

聖代

初爰長柄の橋とかけ家なり

人日

摘りせそくちと八色れ若菜うさ

うゝ別拍夢ぬ代ゆりー若菜梅
若菜そくく何とハ舞うと忘ぬ
沢蟹の袂もうこくや門那れ
裾ゆりー山梅起きて若菜うら

乳母如風とささるる門は梅

法中尼とも爰と圓屋の若菜が

子日

け君とりふとむう海、小松の家

削鯉

正月も新とやさびー削うけ

梅

梅うきれさよ志む時ぬ若菜
むめうやんはうも厚米
咲うゆら梅とあ〜ー此日殺るぬ
詩舟福ち道利翁よ句少や梅花
之後も梅穂時をりむめ此花

白集上

三

香具法心く時をくくりの梅
梅の香は卯より梅の香は
む免咳やとやうるその路小ほひ香
梅枝枝よりとやうるその路小ほひ香
母めうや夜初めうく梅枝枝

社政

梅香や風舟百歳の向ちく
紅梅や祢のくくも望く次

紅と祢ちとく梅は志をくく

外龍梅

紅くもけ来遠くやむ免れを家

梅

うくひとくの九つ福りく初音
梅は鳴るくあてのくはあり
うくひとくや舟の星のく目わん
梅の朝隈さく梅くく梅く

春賦

雪の中より戸明ぬ朝の静

老翁景

櫻花より雪より顔見老翁
雪は音よふらり花は折くは

柳

むつりしりしとて庭の庭の柳の
春柳やしりしとて老翁の庭の

いふもれもなきようく柳の
花と雪とまじりて庭の庭の
家や川市よ志のする柳の
二君之君新吹入花や柳の
ゆりかき小枝もくやの柳の
世に能く遠入る庭の庭の
柳のしりしとておのひり
橋よとて踏むもあはれ柳の

夜

洛陽此報編るをきり其くす
うすをせて子や柳りふらん芦の露

乃縁

馬借まかす候くようきり

大井川

落来る也夜もあつ大井川

大和乃御留別

うしふもあつもなきさ夜うね

夜園

唯この歩先進く心静くす

なきはさ

夕夜多きし此鼓志く夜うり

春月

ふふ丈淵深ある月夜うね
おふしの海もなき一絶月

麻もよく藤を纏ふと奈良の月
南く出さくも志くはねおほふ月

藤のふしりし稀しりくは女の琴
孫りくは背しり

夕さといふも草れまらや春の舟
春の舟極ひと枝むろひ草り

猫意

松少む草すもぬくし福この意
端たしく家とくくよ猫乃意

おりの藤の尾よ勉もし川猫の意

我度れ老猫よたつささく

鏡刃くいさおりのひきくれ猫の意

白魚 言帆樓

白魚やそれと志る大の清くは
志る魚や波うけの何日なちく

清雪

清雪や側くまらふ春日山

清言の跡はうりうりを去年の春

言解

言を解ややうく四百八十

余を

破このとれ詠う春の春を

春風

春風や一夜下りて春の春

誰とより侍他春あつむ春の風

春風

春の春はく啼たり春乃風

双心を返え春の春を

春風や枯るそのおハ春を

春風は傘あやもや春乃風

春風やあつさ春を

春風の春は春を

大は

白樂社

三井寺に種さくまの返転

陽を

陽を此掃よせてある層大うか

溪松屏風

岩角より見るとけく榎の影

風中

きれいな夕越ゆくやまのち山

きき風おまをさ次方のやま

海苔

此此れ船夕やまー海苔二枚

き海苔をうけて白く磯の波

仲春

松梅と暮して正月二月うれ

林事一の記を不うけの二月

紅絹裏のうらまをぬくむ水田家

峰松山

白紙

筆・わきむくんと山乃笑ひう

第根

臨睡心く人哉笑ふれんこ山

維子

綿木よその尾立るれ維の

声志何る法解る維のあふ

阿者分のや橋をふふ維子

たすこふいあふあふ維の

涅槃

福らん舎やわく道下、

蕨

こもくわく化しく先ろ蕨

雲菴

朝風やきく一とちよあけ雲菴

心く川家よ声降るこまき菴

春もすくくそめ枯るこまき菴

菜の花も庭をまわす。まきもまわす。

雀子

雀子や余をこれ蠅を追ひて

蝶

極木の庭の香をけりては胡蝶の家
庭の時をわたりては胡蝶の家
蝶々や乞食のまはるる
はまむしと味を遊ぶ胡蝶

蛙

蛙もくまのうへにわたりては
まの蛙のあまうりては
りとの蘭もまを荒る蛙の
傾城にわたりては
新家のまをくまを蛙の家

富士根守

畑うらや大坂内丸を

雑上

莖

人ふまぬ朝まのうらやま莖うね

池田の富みく

先ゆのー熊神の掃く莖うと

野のま

そくくひく牛もまきー樹葉

菜花

菜の花よりけさ大和の道が

春屋

春の日和門ゆく焚備れ新法所

八橋

杖立く春やむくの橋くら

大磯

秋成の情くー春の秋明うら

灯臺

燈ふらふら二日のぬら

守備上

苗代

秋風此二葉のまき一苗代田

雛

桃様 白髪の雛もあまの
清くふれもあまの一木乃雛
ふり白此細も雛の月
はさくと月 雛

系解

をち屑も女ちりけ 系志解
下系の 雛も 系志解

胡葱

胡葱や小 雛れ小 町の 抽あめ
あさつ 雛や 結つ 雛も 系志解

楳

桃咲 雛や 牛の 雛も 系志解

汐干

御膳上

婦りあふ女う路の沙干し

出代

出うらふや口身くましく大男
おうりりや花を舞舞く様町

死

おとしくとおせく死の阿うが
長采うハ転よこそお世系さう
死あまく程ゆさ目とあまうり

うとわりれ花よ垂くむ世の業
成佛の権ゆくらへ花はうり
是下くまちくはくさく死の陰
あふくまき喜あ花のる転う那
花くま紙拾ふるあし一花さう
芝居皆やうむてもあし一花盛

東叡山

まふあや世よまきくして死切な

洛陽

外一首めしぬ山をー花乃ま
傘ささく駕かく花のみやこが

旧跡

紅糸より花よりーこー糸の麻

芳野

あーまやちる世のためー地ふ

禁よ辱くりー

あーーや昔をとりて花一本
花喰ふ能も乃海をよーの川

芳野大淵

ちる花をあつめを淵のこころ哉

昔法有

昔法有花うさまけき法ひるり

初瀬

むー非被くもてや春の花

巻之二

五

深草元政古墳

石より石より法の杖あり併之り

橋

世に中ち之日よりぬる橋より
我富の橋よりすきてくくく
刻あまる部れ外ちさくく
来く及を又奥より人橋より
ちの橋程ちりり人供と記

拙情も老よんくくやちるさく
表さくくや之味線深く人通

志くくく芳世の山中よりさきり
くくは名ある所くは景をくくく河原
武江の河安のめくくくく

ひとくくく志くく
者くくく是くくく
うくく世を月くくく
毎高くく後思ふありや山はくく

巻之二

七

美山亭

橋戸や繩毬いつけぬ盃
日暮るは古のともなり山さくら
子巖れ丸をちくまをちか橋
りふとうり老子けりし
庚辰此少月六日遊を失ひし時
ちか果く大宅をぶらり家橋

海棠

海棠や柳とてまきまき
海棠や花の中うらうすね葉

聯瑞

縁籠屋の夕くれあおめは

麻涌ふき

人の代り成て見よるは

若船

若船此緒少くはる船日丸

句集上

若船の小古刀をさく途みりり
ありとく約のひまひ小船うれ

山吹

山吹や旭れまゝの 暮るてゆく
やみさきや月も影も沈あつた

菖

投うけくたのむ色うつり松より菖
立されそまゝ日ら言ふ一菖の花

山古や一日さちれ新ぼり

春隻のおふつのをさと菖の古

仍春

夕雲花蔭るや春のさきとまより
ゆく春やさちくは澄る田の穂
阿比春のさきとまより
けり春や一声まゝとまより

句集上

七

養古句集復し初

更衣

橋平川出鉦の音一夫の
我下綿ぬきさすて
武士此矢を世より
給う

多の器と倍ぬき杖と

いさ路隊も只とて

時多室よ清く一老婆ありよ

楽てうらやま山のか
めくさす切を
労を忘る

先門此姥み用ありころを

白年

古きまを
白くぬくさ
骨中よ

系系

鳥啼く志川心阿る

和歌集上

廿

郭公

君ぬ表をこゝは出れぬやま
是くは鳥は星や海くま
郭公一声復たこゝ先あり
耳は千をけし牡丹よ郭公
釣く子懶く出くは海くま
竹枝く森くふくや不くま
鳥類よ鳥くまはこゝり郭公

系

若くはめ音や懐ひく念

嵐山

二の声くまをさる花たり郭公

新根

去踏く歩目もさし海くま
平くます明や氷室此一帯
空くまは森よこの音や不くま

和歌集上

廿

かゝりしよるあささしや群之
やさき原を蹴落して出るる花
一とせよニツの月名や何ぞきき
本町して又あさしにや 記
世を變れお位も乃を浦次群之

灌佛

山寺やみ色りあやうの花中堂

牡丹

花をばしし新と牡丹の
橋ちる果や不まんれ君丸に
花をさすい面不しあぬ牡丹うか
白雲れそやうさくそふん
多きさしし言相牡丹うか

昭和九年四月日原川を世成居
森真成就の日史宅翁十七回忌
すのこころ

花をばしし牡丹を蓮のうそね

今集上

七

青蘆

凡そ此を念のうしめや青蘆

葵系

あまゆふのうしめや青蘆

杜若

何ぞ此冠のうしめや青蘆

懶越のうしめや青蘆

嬰出粟

うしめや青蘆

麦秋

乞食せん世にあはれや青蘆

強孫のうしめや青蘆

麦の穂も出揃ふや青蘆

茄子

一富士の隠るや青蘆

筆

今集上

七

舟のり

廿七

舟の子や花あはるさとの男さうど
筆をゆり出と竹はあはしく船
舟の子やあふりくせそ亭さうり

難

くれあわと花ようさうさう——初難
面白れ書あささ高やを川うはな

難

難よふり富うさく世ひと秋難

浮のらぬ花ゆきさうりてや難の屋

難よ高持せそ長し——一木

——とそよいひらんすの版

大磯さう

難よ紙ふとぬさうさう——
——石

花袖

惟光をふまへるさう花袖さ
一枝をりひるさう花袖うね

舟のり

廿七

葛城山人の落しおのむくと云々

袖は花や立場く乃詩百篇

或人のものゝ女のよめる貝ふらひは
はくろりたる意の形をさかしく柳か小舟
とる物よ似侍ける是は源とをささく

二層さの花袖も娘——早の舟

実橋

実さうやと成粒り——さ吉理

下園

下園お乾うぬ園知れ志何く

黒塚

素子さへ齒言おそろ——本下書

和分浦

後う福る素の茂た——和分浦

牙延

け山の茂や如れ一字より

空海山

苔より及る少く越る志けり哉

後醍醐帝御廟

百官れ言と依るや其才を

菴菴

うきりや漸きを次への流

院家と市こそよけよきなりし

水鶴

日やけ田よ水門たなく水鶴哉

菴菴の奥も庭をよきみ鶴

紫翠

屋よりきの花やと蓮よ紫翠の風

蓮よ花と蓮よ花とぬ紫翠の風

川蝉の風り何りいふり

新茶

柳の尾

唐土のさひしきとんせと新茶哉

志とく洛よありき

山崎

其

岩塚の紫打禁守原の新茶

後河村のありるは子来子来の湯の
舎をまつてはるる茶の一無あり

之勝りて飛石いり川 苔むす

流るる温泉の古湯やまの茶

茶吟

我も来るる茶をうらさるる人こそ

行書し本書しむる茶吟

相茶

酒桶の脊中を日や相れ

茶

うらるる酒を一日の茶

追まらば月より茶を

茶ふも茶園の茶吟

傘さして茶を

園の茶を

茶

茶

新古今

歳見は果とありうる帆無紅

系

不と時我多れ其と頼うれ
たせし古ふもな家免う神

百炼鏡

時けく鏡言 ちりみ日自

鏡馬

紫雲越の波は海もんくた

君抱お石とる

又このやいさ帽子よ志のふら

み月面

み月面やある秋心りみねの月

竹を何と云おほくかり良月面

うと水や繪紙よさつる芦の音

松を漏る音暗——早月面

秋ハせめくほくふ花あり又月五

後注

川越る目もよかしく早もたぬ

多初川を修勢態世の二種川にて
まゝんえたるふ中しくや多ふ森面の
夕晴もうれし

紀の月も逢初川や早月晴

藤紀

藤の葉や際ちく水の末ちく

田植

松よ目をうらひむしから田植うら
を里や二節えさちりうく
年らうく月うり淋し田植
山陰や人目おのり田り

任吉涉田

乳ちれ程女け田の乙女つめく
うや川舟の名をのりうら

あつたうきふあひりーあつたあ

神苗やうふ試うきふのきんき

二尺格のふりうきふと法ーあつたあ
上田之及味暗八斗小者きりうきふの
ふん市あつたあ神所のねあとおひ
出てきりうきふ高あつたあ乃れーあつたあ

玉苗北門田持けり、くよ解

青田 南朝賢古

冬田きりうきふ田あつたあーあつたあ

尚麻

喜田きりうきふー深寺北右部きりうきふ

田子

あつたあぬまぬあつたあきりうきふ
山と川脊中あつたあー田子あ
秋のあつたあ及法きりうきふ人田子あ

善竹

きりうきふ競きりうきふきりうきふ

為樂上

岩を穿て嶺一さうこころ行
とらうかうはくそ麻子今年舟

物舟

物つひや船くれりひ捨舟
船も物舟成るこころく物船
物流うひや千子よ後子あつ川
つ道物や春古此流も木あるより

照射 白を舟

祐成のつら秋意せぬ照射うぬ
時致と山あふと春てこりしうぬ

教を

深き此をきく系子浅故や里系
教やりしう後教うる里の舟あふ
夏うこころ森ぬ里此故をうぬ
故を大やうう海くも松の舟

白骨観

菱腰の月とのやささる藤元うれ

祇王寺

尾寺やお粉白粉も教部草

言野

蚊の居ぬも浮世の介そ核の存

紙性

我店も紙性うせそく無くも

業平の知く水くも紙性うれ

菱系

菊作る思葉の介や英人草

志のそくくとのや菱のふく身

花うつくしき草

里人古くす菱系も花うつく

小夜中山

紫陽花や襟身はくもあはく心

紀列親志うれ

荒磯や松子志々次親志々々

秦徐福古墳

松子此唐をやりしは塚跡りぬ

庚辰の秦墓と云ふはひく昔南緯史の
不存なりありしは

杖立さけ遠く舟屋よりか

至る河や平く横くふくく舟

至るうやわたましくむら波の音

至る和明くはるく意志くく

夕の舟や他方目少は融け暮程

此

ちくけあき此むく朝のかけま

此物やいさ此やくと暮ま

氷室

六月を橋み初るや氷室りり

六月は氷もそくそやこり

祇園會

祇園會中人をりて籠の層はるも
祇園をよや京を日傘の下をり

富士詣

そと取降高れ活衣や富士を

白河園

所社を秋の風をりて甘きあはれも

竹婦人 簞

まふよりおのしそめり竹婦人

曉を小町の月夜や竹婦人

葦生や手ぬぐひ懸る竹婦人

七符ももる符ともいふ竹婦人

狗懸の風をりて道をうむし強

丑雲

客婦り母を運る雲のりおれ

園之扇

友のよりしうちをりて小傾城

極つけの田つゝんく其の園庭うら

續

おりしるおらちやとれそ月並そま
れりし海の園庭中

まのまゝかほらふゆる白園庭

扇

融園此跡を扇此あふゆる
いとけあささよとそとて時扇うら

清水

清より東哉トおりむくそ

我新母先何ふ園此清あうら

涼しきハ子初あやらり清清水

泉あふ川中よ流る清あうら

山伏の汲水しる清水うら

狂行柳

印しとらふ腸流る清あうら

自得

晒るくあを惜まらば月日く如

暑 市中

之味縁より白のせくあつた
大津絵より丹れくるる星の
於苗のうき枯る阿のさう

西陣

就虎蹴もあつそめて思ふ

貞徳公御四輪多羽只相尋

夏陰や古をいふ年此の夕

かゝるは招きく縁結まむいふ
夏は縁を
なしては夏は古をいふ
なしては夏は古をいふ
なしては夏は古をいふ

帷子やぬけを風を川おさる

伸縮 簾

飛人の凱陣よりそ伸をさる
簾賣此阿字と字ゆる身も

雲峯

乃曰るをいつくす日ありまの字

蓮

菅笠の類く蓮のうさふく
毎こまふハふふとそふ紀りり蓮の死
白蓮より人類さる侍取明く神

侍吏登翁

六月を終帳子より名残くれ

一周忌画儀前

秋さるぬ人のぬけを泣思ひく

之思忌

似人おちるさ六月廿紙子か

石碑造立

之伏の復ちる石の虜う神

夕立

夕立やお合傘を晴く
ゆふちや地ふ喜田の藤を法く

納涼

血心と川氷りくく納涼うか
町の焼れ部く橋や夕きり
是代丹住持の志くぬすくうの
若法くふうつるんや夕きりみ
涼くくや寺を暮石れくく
本鏡れ落葉すなりゆかすく

神奈川感

ふくく海へ入来る帆あり夕すく

白隠禪師相見

涼くくや富士と和尙と田舎の浦

龍虎寺

くその高ろ飛くく富士と龍虎涼く

下経園

下経れ園くは母や申おく

麻行く田舎く

牛馬のうらもろりぬ夕さきみ

四條河原

風涼し扇れ之系涼きよる

古神宮法樂

傳くや似たりとて余中とあるは神宮法樂
川の流と居るてく深しとてあるは

我彩も鏡りしつとく神涼し

ゆきひ武隈に松りしつとく

家志も松のおもりむ下とくみ

不忘山

かく家日も若くはねたの山涼し

夏月

若山より市のものたり夏の身

沙碓

人去る隙もえきり沙碓川

夕涼子鳥帽子忌むや中後川



白集上

